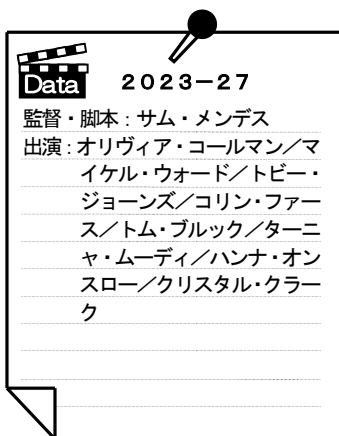




👁️👁️ みどころ

映画館と映画愛をテーマにした名作中の名作は、イタリアのジョゼッペ・トルナトーレ監督の『ニュー・シネマ・パラダイス』（８９年）だが、サム・メンデス監督は英国版のそれを目指して本作を！

舞台は海辺の街マーゲイトにあるエンパイア劇場、時代は俄然サッチャリズム旋風が吹き荒れた１９８０年代だが、肝心のストーリーは？

ヒロインが少しヘン（？）なのが最初から印象的だが、劇場主も少しヘン！また、新たな従業員となる黒人青年との不倫ストーリーはかなりヘン！あまり納得できない展開が続く中、ラストでは、サム・メンデス監督流の映画愛が謳われるが、その評価は？私はイマイチ納得できなかったが・・・。

■舞台は英国の映画館！時代は８０年代。主人公は？■

映画館を舞台にした最高傑作は、イタリアのジョゼッペ・トルナトーレ監督が３３歳の時に撮った『ニュー・シネマ・パラダイス』（８９年）（『シネマ１３』３４０頁）。同作はシチリア島にある映画館パラダイス座を舞台に、映写技師と少年との友情を軸とする映画愛を高らかに謳うものだった。

本作は、それと同じように、イギリスの静かな海辺の街マーゲイトにあるエンパイア劇場を舞台とした映画で、その主人公は、そこで働く中年女性のヒラリー（オリヴィア・コールマン）だ。スクリーン上に俯瞰されるエンパイア劇場の全体像を見ると、その豪華さにビックリ！中之島にある大阪フェスティバルホールや宝塚にある宝塚大劇場のエントランスの広さや大きな階段と比べても何ら遜色はないから、その立派さは相当なものだ。本作は、そんなエンパイア劇場に主人公のヒラリーがカギを開けて入る朝のシークエンスから始まる。

『ローマの休日』(53年)で見た女優オードリー・ヘプバーンの妖精のような美しさに比べ、『女王陛下のお気に入り』(18年)『シネマ43』25頁)で見た女優オリヴィア・コールマンは、美しさなどこれっぽっちもない、どちらかというと、“大阪のおばちゃん”的雰囲気を持った、わがままおばさんだったが、その役が実にピッタリだったため、アカデミー賞主演女優賞を受賞している。しかし、本作でオリヴィア・コールマンが演じるヒラリーの様子は最初から変。しかも、劇場支配人のドナルド・エリス(コリン・ファース)と不倫関係にあるらしい。これは、一体ナニ？

■□■新入社員は黒人男性。彼の働きぶりは？ロマンスは？■□■

『ニュー・シネマ・パラダイス』は30年前の回想シーンから始まった。つまり、30年前の幼い少年が、今は映写技師として故郷の村に戻ってきているわけだが、それは一体なぜ？それが物語の基礎になっていた。

それに対して、導入部でヒラリーとドナルドの不倫の現場をチラリと見せる本作は、新入社員として若い黒人青年スティーヴン(マイケル・ウォード)が入社してくるところから、本格的ストーリーが始まっていく。ベテラン従業員のヒラリーが新人に劇場を案内したのは当然だが、立入禁止とされている上階のスクリーン〔3〕〔4〕は使っておらず、その上階の広いラウンジも使われておらず、鳩が住み着いていたからアレレ・・・。

2023年の今、米ソ冷戦は遠い昔となり、新たに米中対立が世界の焦点。そして、ウクライナ戦争によって、西欧民主主義陣営 VS 共産党一党独裁制全体主義国家、という新たな冷戦構造が形成されている。しかし、マーガレット・サッチャー首相が絶大な人気を誇っていた1980年代のイギリスは、アメリカのロナルド・レーガン、日本の中曽根康弘と共に“新自由主義”が支配していた時代だ。新自由主義は、「サッチャリズム」と呼ばれた。この新自由主義に対してはとりわけ労働界からの反対論も強く、全国的なストライキが多発していた。

ヒラリーとの不倫関係を続けているドナルドが、“コト”が終わった後、こっそり打ち明けたところによると、1981年に公開され、後に第54回アカデミー賞作品賞を受賞したイギリス映画『炎のランナー』(81年)の上映会が、近々エンパイア劇場で実施されるそうだから、エンパイア劇場も捨てたものではない。ところが、当初、厳しく新人教育に当たっていたヒラリーは、スティーヴンとの間でも不倫関係となり、人気のない最上階のラウンジ内で“情を交わしていた”から、アレレ。ヒラリーは、セックスの対象を中年男のドナルドから若い黒人男性のスティーヴンに乗り換えたの？2人だけで行った旅で砂浜で遊んでいる2人を見ると、そう思ってしまうが、双極性障害(躁うつ病)の持病を持つヒラリーは、砂遊びの最中に突然荒れ始めたから、アレレ・・・。ヒラリーの病状は深刻なの？

■□■双極性障害の症状は？晴れ舞台が最悪の事態に！■□■

私は多極性障害の症状がどんなものか知らないが、本作では、とにかく冒頭からヒラリー

一の不機嫌そうな表情が際立っている。そんなヒラリーが、ドナルドと事務室内で露骨な言葉を繰り返しながら行っているドナルドとのセックスは最悪！これでは、職場の統制が取れないのでは？そう思っていると、ヒラリーは今度は新入社員のスティーヴンとも密かなセックスを交わし始めたから、こりゃヤバい。もちろん、ドナルドはそれを知らなかったから、今日、ヒラリーが求めを拒否すると、ドナルドは不機嫌に。そのため、その日のドナルドの行動が多少強引になったのは男性（さが）だが、まるで強姦（近々、現行の強制性交罪から不同意性交罪に罪名が変わるそうだ）のような状況を見ていると、双極性障害の持病を持つヒラリーの症状は悪化するのでは？そう心配していると、案の定、ある日スティーヴンが出勤すると、ヒラリーは長期休暇を取っていると知らされたから、アレレ・・・。

他方、エンパイア劇場で実施することになった『炎のランナー』の上映会には、市長をはじめとするセレブたちが正装で参加していたから、ドナルドにとっては一世一代の晴れ舞台。もっとも、この上映会にはなぜか長期休暇のはずのヒラリーも正装して出席していたから、一波乱ありそう。そんな舞台でのご挨拶は長くなりがちだが、ドナルドのそれはコンパクトで巧みなものだったから立派。ところが、「これから上映です」と短く挨拶を切り上げたにもかかわらず、その直後にヒラリーが1人で登壇してマイクを持ち、わかったような、わからないような挨拶をしたから、ビックリ。その場の混乱がそれ以上広がらなかったのは幸いだったが、上映会終了後、ドナルドの妻と鉢合わせしたヒラリーは、妻に向かって、ドナルドと長い間不倫関係にあったことを大声で告白！その証拠としてコンドームのありかまで叫んでしまったからすごい。

その結果、スティーヴンが心配してヒラリーの部屋に入り込んでいる時、かつてヒラリーが入っていた精神病院の担当者と警察官がヒラリーの部屋を訪れ、ドアをこじ開け、ヒラリーを精神病院に隔離してしまうことに。隠れた物陰からそんな事態を目の当たりにしながら、スティーヴンは何も援助することはできなかったが・・・。

■□■あまり魅力もなく納得もできない展開のまま終盤へ！■□■

本作は、今や巨匠と言われているサム・メンデス監督作品だから大いに期待していたが、私はヒロインのヒラリーにも黒人青年のスティーヴンにも全然魅力を感じない。え、劇場主のドナルドもヒラリーとの不倫関係でしか存在感を示さないため、そもそも最初から映画愛が盛り上がってこなかった。そんな中、突然ヒラリーとスティーヴンとの新たな不倫が始まったから、私はサム・メンデス監督の脚本にあんぐり。また、中盤からヒラリーは精神病院に入れられてしまったうえ、今度は突然、イギリスにおける黒人排斥運動が続いている「イギリス国民戦線」のデモ隊が登場し、劇場内にいた黒人従業員スティーヴンを見つけて乱入し、暴動。彼らの暴行を受けたスティーヴンは瀕死の重症を負ってしまうから、アレレ。この映画のこの展開は一体ナニ？何を狙っているの？それが私には全くわ

からない。そんな混乱状態のまま本作は、スティーヴンが何とか回復したところから、そのままアレレと思う終盤へ！

■□■こんなラストのために、こんな物語を？■□■

映画のフィルムは可燃性が強いので、要注意！『ニュー・シネマ・パラダイス』では、それを思い知らされたが、それと同時に同作は徹頭徹尾、映画愛に溢れた心温まる名作だった。しかし、エンパイア劇場を舞台とした本作では、『炎のランナー』の上映会で、劇場主のドンナルドやスタッフ一同の映画愛を垣間見ることができるものの、ヒロインのヒラリーが映画をどう思っているのかは全くわからない。それどころか、物語のラストに至って、「私は1本もまともにはじめから終わりまで映画を観たことがない」と告白するからビックリ。何とか再び職場に復帰し、献身的にスティーヴンの看病をする中で、スティーヴンの母親からの信頼を獲得したヒラリーは、映写技師をしている男ノーマン（トビー・ジョーンズ）の好意によって、ある日はじめて1本の映画を一人で劇場に座って観ることになったが、さて、それは何の映画？そんな興味を含めて本作のラストをしっかり味わいたいが、こんなラストのために、サム・メンデス監督はわざわざこんな物語（脚本）を？私はそのことにあまり納得できないため、本作は残念ながら、星3つ。

2023（令和5）年2月27日記